

Title	民主的な, しかしコモンズではない未来のヴィジョン : コミュニティ・デザインとメディア・キャンペーンにみる集合的生命の共有と創出
Sub Title	
Author	小川(西秋), 葉子(Yoko Ogawa Nishiaki)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2015
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.65 (2015. 3) ,p.39- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20150300-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民主的な,しかしコモンズ ではない未来のヴィジョン

——コミュニティ・デザインとメディア・キャンペーンにみる集合的生命の共有と創出——

小川（西秋） 葉子



▶ はじめに：メディア言説とアメリカ史上初の都市公共公園

いかなるコミュニティ・デザインであっても、その始まりに際して、現状にどのような問題があるのかという認識に端を発する。アメリカ史上初の公共の都市公園と考えられるセントラル・パーク設立運動の場合も例外ではない。実際に、セントラル・パーク設立運動は、アメリカ合衆国ニューヨーク市の理想的なあり方と当時の状況に乖離があることを認めることから始まったのである。その認識をもとにしたメディア・キャンペーンを通じて、オピニオン・リーダーたちは、ニューヨーク市民の意識を惹起し、都市型公園をつくらうという合意形成を促した。その結果、19世紀のなかば、ニューヨーク市民が参加し、エージェンシーの組織化ののち、園芸ジャーナリスト出身の都市デザイナーの主導のもとで、セントラル・パークは創設されることとなった。

本稿の主題は、コモンズとは異なった形で推進されたこのコミュニティ・デザイン運動の目的、過程、成果を探ることにある。すなわち、ニューヨークでコミュニティ再開発の必要性がメディアを介してどのように認識されていったか、そしていかにしてそれが人工物として具現化されるに至ったか、さらにセントラル・パークの創設によってどのような価値が創り出されたのかを辿ることにある。このようなヴィジョンとアクションをあわせもつ19世紀のコミュニティ・デザインは、グローバル化が進展した21世紀の我々にとっても（小川〔西秋〕2010、伊藤2013）、今後どのような生命の集合体を共有し創出するかを考えるうえで、きわめて示唆的であると考えられる。

▶ 1 コミュニティ・デザインを問題化するメディア・キャンペーンとその背景

19世紀半ば、アメリカ合衆国は急速な都市化に直面した。その傾向は、ニューヨーク市で最も顕著だった。東海岸に位置する地理的特性は、貿易港として発展するのに充分な要因だった。さまざまな舶来品と同じように、ヨーロッパから多くの移民が、世界最大の新たな商業センターに押し寄せた。1850年、ニューヨーク市の人口は70万人を超していた。驚くことに、この数字は19世紀初頭の3倍以上である。南北戦争の頃までには100万人ほどが都市部に移住してきた。その結果として混雑が発生し、たとえば、マンハッタン南部の七つの行政区における人口密度は爆発的に増加することとなった。具体的には、1820

年から1850年ごろには、1エーカー当たり94.5人だったものが163.5人になっていたのである。そればかりか、移民の数が増えるに伴い、ニューヨークだけで不法滞在者の数が2万9000人に達した。

人口増加に伴って、都市環境は悪化していった。まさに人口過密こそが、都市生活を劣化させたのである。ニューヨーク在住者は身体的にも精神的にも疲弊していた。その理由として、第一に、不十分な公衆衛生によって伝染病がまん延したことを挙げることができる。

通常は道路が舗装されていなかったもので、至るところで汚泥を目にした。汚泥をむさぼっていたのは野生の豚の群れであった。豚は地元住民が出した排棄物を貪っていた。

ごみ回収業者はおらず、住民は自宅から出たごみを道路に投げ捨て、豚が食べるまで放置していた。あるニューヨーク市民は、雪が降り積もったあと、汚泥、排棄物、糞尿が巨大な塊になり、道端に何週間も放置されていたと述べている (Baydo 1974: 497)。

下水処理施設は設置されず、排泄物の処理に配慮が払われなかったことから、ニューヨークは不衛生な都市になっていた。人口過密の結果として、汚物が散乱し、都市特有の病気が発生した。この見方は統計的データからも裏付けられている。1848年に英国政府が出版した公衆衛生学の古典として名高い『都市生活者の健康に関する報告書 (The Health of Towns Report)』は、都市集中が健康被害を及ぼすことを統計データを使って示している。

ニューヨーク市におけるもうひとつの問題は社会秩序の混乱である。ヨーロッパから新たにやってきたニューカマー移民のほとんどは、新天地アメリカで職を得ることが困難だった。実際に、貧困層の86%はそのような移民たちだった。貧困が悪化することで、犯罪も増加した。多くの移民が流れ込んでいったのは貧民街であった。そのような場所は、ギャングや犯罪者や不法行為がはびこる悪名高い区域になった。さらに、それぞれ異なる背景をもった移民は一体感を欠いていた。このような社会環境においては、彼／彼女たちにとって、「自分たちはアメリカ市民である」という意識をもつのは容易ではなかった。

また、この地域では、緑豊かなオープン・スペースやレクリエーションの機会が失われていった。この頃には、マンハッタン島には、市民が共に会し、集まることのできる広場はごく限られていたのである。巨大都市において人口が増え続けていった結果、人々は、自然の中で休息と安息を得ることができる場所を奪われていった。

シティ・ホール広場、(かつての軍事演習場であった) バッテリー、マディソン・パークのような数少ない広場を除いて、公共の屋外レクリエーション施設はなかった。実際、市当局や民間業者が居住地域を商業目的で売却したため、公共空間を目的とした土地は、1800年から1850年の間に15%減少した (Fabos, Gordon and Weinmayr 1968: 18)。

公共のオープン・スペースの欠如は、コミュニティの生活にとって深刻な欠陥である。なぜなら、そのような公共空間は、都市の活力を高めるうえで重要な役割を果たすものであったからである。その機能は、単に自然の美しさやそれを楽しむ機会を提供するにとどまらず、また、健康を維持するための手段にとどまるものでもない。これは、まさしくニューヨーク市の集合的生命そのものであった。オーガスト・ヘクシャーは次のように主張している。

オープン・スペースには、都市生活に不可欠な資質——偶然の出会いや多様性、コミュニティへの帰属意識を具現化する力など——が現れる。住民は、何が起きているのかを察知し、コミュニティの雰囲気を読み取り、他者と交じり合い、コミュニケーションを図っていく機会を屋外の集合空間に見出すだろう。このような野外のレクリエーション施設のない生命活動は、私たちが都市生活と結びついたものとする活力や魅力を著しく欠いたものになるだろう (Heckscher 1977: 4)。

ニューヨーク市の都市環境がかなり深刻な状況にあり、人々の生命に悪影響を及ぼしていたのは明らかだった。より具体的に言えば、衛生状態や道徳秩序が悪化し、自然あふれる遊び場が失われていったが、それは人口過密の負の産物と考えられた。そんな状況のもと、住民の身体的・精神的な意味での健康が衰えていくという現象が顕著にみられた。とりわけ、コミュニティ意識をはぐくむ機会がほとんどないために、増加の一途をたどりつつも、多様な背景をもった移民たちは、また、社会から分断されていた。そのような状況は、理想の都市生活からはかけ離れたものだった。セントラル・パーク設立運動は、19世紀半ばのそのような社会情勢に端を発する。換言すると、都市の雑踏のなかに遊び場を創設しようという提案は、ニューヨークの悲惨な状況を改善することを目的としていた。

1840年代から1850年代まで展開されたセントラル・パーク設立運動は、有力な市民リーダーやワシントン・アーヴィング（Washington Irving）らロマン派の文学者によって支えられた。とりわけ、ウィリアム・カラン・ブライアント（William Cullen Bryant）とアンドリュー・ジャクソン・ダウニング（Andrew Jackson Downing）は、文筆活動を通じて、この主張のキャンペーンを繰り広げた最大の功労者であった。1844年7月3日、著名なロマン派の詩人であったブライアントが『ニューヨーク・イブニング・ポスト』紙上の社説における強硬な意見表明をおこなったことにより、このメディア・キャンペーンは開始された。「新しい公園」と題されたキャンペーンの皮切りとなる彼の初めての論説記事のなかで、彼はニューヨークに公園用地を取得することを提言した。ブライアントは、大規模な都市型公園を提唱するうえで大きな影響力をもったおそらく最初の人物であったが、1845年にもイギリスから次のような文章を書き送り、改めて都市型公園に関する提案をおこなった。

あなた方が暮らしている都市の人口は爆発的に急増している。ニューヨークの夏は暑苦しい。そして、暑くて混雑した街は大気汚染を生み出している。我々の住むニューヨークを敷設するとき、公園や公共庭園を整備しなかったことを私たちは後悔している。だが、そういった施設のための区域を用意することはいまだ可能である。……マンハッタンにはまだ占有されていない土地があって、それを公園建設の目的で確保することは可能であるかもしれない。そして、その土地の表面は岩石が露出して平坦ではないことから、それを基にして土地デザインをおこなって、またとなく美しい遊び場にすることができるだろう。しかし、この問題を議論しているうちにも、ニューヨークの人口増加は進み、ニューヨークの土地を埋め尽くし、我々をその目的から遠ざけているのである（Reps 1965: 331）。

広大な公共公園（public park）が必要であるということは、二つの明瞭な現象が示すとおりであった。第一に、郊外の墓地には、ニューヨークから多数の訪問者があった。第二に、数々のヨーロッパの都市では、広々として美しい公園が享受されていた。

都市に存在する墓地が人気を集めていたのは、この超過密都市において人々が緑あふれるオープン・スペースを渴望していることを反映していた。多くの観光客は、ブルックリン地区にあるグリーンウッドのような広大な墓地の田園的な環境を楽しんでいた。そこではヨーロッパ的な景観デザインや流行が採用されていた。ダウニングは、造園計画の推進を訴えたもう一人の民間人で、また、『園芸家（*The Horticulturist*）』誌の編集者でもあったが、以上の点を強調しながら、ブライアントの主張に共感を示している。ダウニングは、「大規模な公共庭園が存在しないなか」墓地のデザインはその眺望の美しさで訪問者を魅きつけるのに成功してきたと述べている（Reps 1965: 330）。彼の推計によれば、グリーンウッド墓地への訪問者の数は1848年における9ヶ月間で8万人にも及んだことになる。この経験から、彼は「このように、一般市民は墓地に関心をもっているのだが、このことは、自由かつ適切な形式に則って大都市周辺に公共庭園を建設するならば、グリーンウッド墓地の事例と同様に成功する可能性を示していないだろうか」という提案をおこなった

(Reps 1965: 330)。彼が出した結論は、これらの墓地から学びながら、公共の常設公園を整備することであった。

それ〔常設公園〕を創設し、それが良い影響を及ぼすということをアメリカ国民に示してみよう。公共の遊び場に対する人気は、アメリカ国民のあいだで墓地の場合と同じくらい急速に広まっていくであろうと私は確信している（〔 〕内は筆者による挿入）(Reps 1965: 330)。

また、ニューヨークの都市型公園の必要性を論じる際に、ヨーロッパの公園がしばしば言及されていた。1848年10月には、『園芸家』に「公園と庭園に関する議論」と題されたダウニングの評論が掲載されたのだが、そのなかで、彼は、公園が美しいことで評判が高いロンドン、パリ、フランクフルトといったヨーロッパの都市とは対照的に、アメリカの都市には公園が欠如していると論じている。イングランドを離れる際に、ダウニングは、祖国アメリカにも公共空間の整備が急務であるという強い確信を抱いた。このような気持ちは、1850年、『園芸家』に掲載された彼の評論に鮮明に現れている。

ロンドンを訪れるアメリカ人は誰でも……、アメリカの都市には公園がまったくないことに屈辱を感じる……といわざるを得ない。ここイングランドでは、公共公園は、大都市における快楽と必要物として正当に評価されている。ニューヨークにおけるいわゆる公園は、申し訳程度のものにもならない。ニューヨークにあるのは、広場と牧草地にすぎない (Reps 1965: 331)。

上述のような墓地やヨーロッパにおける公園の存在やデザインはまさに、セントラル・パーク設立運動に関わっていた者たちに、さらには、公園の新たな理想像に対する彼／彼女たちの考え方に大きな影響をもたらした。公園に関する彼／彼女たちのヴィジョンには、二つの原理があった。第一に、都市環境における汚染物質を吸収し、それを浄化するような「肺」または「換気扇」となる、緑が豊かで田園的な公園である (Glaab 1971: 70)。彼／彼女たちは、それまで墓地が果たしてきた役割を公園に託した。その役割とは、田園的なコミュニティ生活の長所と言える平穏な機会を渴望するニューヨーク市民のために、自然豊かで健康的な遊び場を提供するというものである。この目的を果たすために、公園は大規模であるべきであるとされた。第二の原則は、民主的統治に基づく公共公園である。旧世界においては、庭園は特権階級によって所有され、主に彼／彼女たちの快適な生活のために設計されるということがしばしばであった。

しかしながら、アメリカでは、新たな公園が市民のためにこそ設立されるべきであると主張された。公園を享受し、運営に関わっていくのは一般市民とされた。セントラル・パーク設立運動に関わっていた人たちは、以上の二つの原理を念頭において、ニューヨークに大きな公共公園を建設するのに必要な5000エーカーの土地を確保することを提案した。1840年代以降のメディア・キャンペーンは、この問題に関する人々の合意を得ることに成功した。その結果、実際にニューヨーク市の再開発を訴える声が高まっていった。1851年の市長選挙の際、公園建設を求める提案は主要な政治的争点となった。新たに選出されたA・C・キングスランド市長の支援もあり、新たな公園に関する議論が活発に行なわれていった。そして、1853年11月17日には59番街から106番街の間にある624エーカーの土地（最終的にはその規模は840エーカーになる予定であった）の取得が認証された。同時に、ニューヨーク市民の税金でセントラル・パーク設立計画の監督をする独立した機構としての公園委員会のメンバーたちが任命されて、セントラル・パーク設立に関する活動が開始された。セントラル・パークを設立する土地が利用できるようになる1856年には、著名な市民から構成される評議員会も設置され、ニューヨークを代表する小説家として名高いワシントン・アーヴィングが初代委員長となった。まさにこのときに、セントラル・パーク設立キャンペーン関係者、市民、行政担当者間で、セントラル・パークに関する

合意が形成されていった。換言するならば、都市生活が悪化していくなか、コミュニティ・デザインの必要性が認識されるようになったのである。彼／彼女たちは、ニューヨーク市に緑豊かな公共公園を創設するという合意を形成して、セントラル・パーク設立運動の第一歩を踏み出した。ただし、それはほんの始まりにすぎなかった。セントラル・パークの理想を実現するためには、それ以降、長い道のりをたどらなければならなかったのである。

▶ 2 言説から公園の空間的布置への変換

設計プランニングの作業は、このコミュニティ・デザインの第二段階だった。セントラル・パーク設立という曖昧な構想が、この過程で明確なコンセプトへと洗練されていった。それと同時に、人々のニーズを満たすための実用的な方略を模索することを通じて、セントラル・パーク設立運動そのものの目的が認識されるようになった。この節では、オウムステッドとヴォーという二人の建築家に焦点をあてる。なぜならば、セントラル・パークに対する彼らの理想や考え方は、間違いなくこの都市再開発に不可欠な要素だったためである。

1857年9月11日、フレデリック・ロー・オウムステッド (Frederick Law Olmsted) は、ワシントン・アーヴィングの承認のもと、ニューヨーク公園設立委員会の委員長として任命された。彼は、1822年、アメリカ東部のニューイングランド地方の裕福な商人の息子として生まれたが、当時、この農業文筆家はまだ34歳の若さだった。彼の自然に対する強い関心は、幼少時に広範囲にわたって家族旅行をすることで培われた。この経験から、彼はイェール大学で農業科学と工学を学ぶことになった。しかしながら、彼は視力が弱かったため、大学での教育は短いものになってしまった。彼はニューヨークのスタテン島の農場と園芸場で働き、1848年以降には、複数の雑誌に農業と園芸に関する記事を書くようになった。ニューヨークで広まっていたユートピア的社会主義運動の思想的な雰囲気は、公共機関を通じた都市環境の向上に関する彼の考えに影響を与えた。

それに加えて、オウムステッドの社会改革への関心を強めたのは、二つの旅の経験であった。まず、1850年頃にイングランドから西ヨーロッパまで歩いた旅は、彼の人生における転換期のようなものとなった。彼は、イギリスの公園や庭園に深く感銘を受け、1852年には『アメリカ人農夫のイングランド徒歩旅行体験記 (Walks and Talks of an American Farmer in England)』を出版した。特に、バーキンヘッドにある「民衆の公園 (People's Park)」の人工的な田園風景 (pastoral landscape) は彼の心に深く刻まれ、後にセントラル・パーク構想のモデルとなった。それと同時に、彼は、イングランドと西ヨーロッパにおいて、都市化、貧困、犯罪といった重大な問題への国際的な視野を養いつつ、都市再開発に関する諸外国のさまざまな実験から学び吸収していった。

オウムステッドに影響を与えたもう一つの経験は、1850年代に奴隷解放運動が活発化していたアメリカ南部を歩いて旅をしたことであった。彼は『ニューヨーク・タイムズ』紙の依頼を受けて、南部に旅立ち、南部での生活と奴隷制度の影響を鮮やかに描写した。その結果、彼は、南部奴隷制度に対極するものとして民主主義とアメリカ文明を捉え、これらの発信地として北部都市の質を高める必要性を認識したのである。これらの経験を通して、彼は、科学的な農学からコミュニティ・デザインなどのその他の社会的問題にまで関心を広げていった。

セントラル・パーク設立計画におけるもう一人の主要人物はカルヴァート・ヴォー (Calvert Vaux) である。彼は、才能ある英国人景観デザイナーであり、後にオウムステッドの設計パートナーとなった。1824年にイングランドで生まれ、マーチャント・テイラーズ・スクールを卒業した後、ジョージ・トゥルーフィット (George Truefitt) という有名

なロンドンの建築家に弟子入りした。イングランドの著名な建築を探訪する旅で、彼は多くの都市にある公共のレクリエーション空間に魅せられた。それらは、彼が子どものときに故郷のロンドンにある公園で夢中になって遊んだことを思い出させた。この体験は、彼が外国の宮廷式庭園を学ぶために大陸に渡った直接的な動機になった。1850年に若きヴォーをロンドンで見出したのは、公園設立のキャンペーン推進者の一人だったダウニングであった。専門知識と実務経験を備えた建築アシスタントとして、ヴォーはダウニングに同行して、アメリカに渡った。その後、オウムステッドとヴォーは共同で建築設計にあたることになった。

1858年、オウムステッドが公園設立委員長に任命されたまさにその当日に、委員会は公園デザイン案を一般公募すると発表した。その当時、最終候補企画の評判が最も高かったのは、委員会の設計責任者であるエグバード・ヴィール (Egbert Viele) のものであった。彼は、建設予定地の地勢を綿密に調べ、公園開発に向けた草案も準備していた。スポンサーであるダウニングの死後も都市設計の実務経験を積み重ねていたヴォーは、この公園の開発に強い関心を持っていた。ヴィールの応募プランは「明白な欠陥」を抱えたものであり、ニューヨーク市にとっても、公園建設のために精力的なキャンペーンを続けてきた恩人のダウニングが残したこれまでの功績にとっても不名誉なものであるようにヴォーには思われた。

ヴォーは強い目的意識を持ってコンペティションに出場すると決意したのだが、その際、彼はオウムステッドの協力を必要とした。この状況にあって、オウムステッドこそが彼のパートナーとなるべき人物であった。ヴォーは、ダウニングの存命中にオウムステッドと引き合わされていた。ヴォーが記すように、オウムステッドは、若手の監督者として、毎日、現場に足を運んでおり、「地勢——委員会がコンペティションの参加者に提供した調査結果では明確にされていなかった——に関して正確な観測ができる」ということは否定できない事実であった (Glaab 1971: 136)。当初、オウムステッドは、ヴォーの申し出をいったんは固辞した。なぜなら、ヴィールは、委員会においてオウムステッドの上司であり、コンペティションの参加者の一人と目されていたためである。さらに、オウムステッドを待ち受けていたのは、初期の準備作業や大人数の労働力の管理といった現場監督の職務であった。しかし、最終的には、ヴォーの説得を受け入れて、オウムステッドは、ヴォーとともにセントラル・パーク設立に向けたデザイン立案の準備に着手した。

彼らの成功は劇的だった。1858年4月、『緑の芝生 (Greensward)』と題された彼らのプランはコンペティションで優勝した。委員会に提出された35に及ぶ設計図面のなかから選出されたのである。もちろん、この結果は、ヴィールの企画案が不採用に終わったことを意味した。4月28日に審査結果が発表されて間もなく、『ニューヨーク・タイムズ』紙は次のような記事を掲載して『緑の芝生』プランを絶賛した。

オウムステッド、ヴォー両氏の計画には、偉大な公園として要求される主要な条件がすべて含まれていることに間違いない。……彼らの計画は、建設予定地の地理的条件のみならず、ニューヨークの景観にも配慮したものとなっている。……幸いにも、私たちはオウムステッド氏を監督者として迎え入れることができた。彼は、私たちの希望通りに計画を遂行する能力に恵まれており、また、私たちの利害関心を安心して託すことができる誠実さがある (Glaab 1971: 137)。

この『緑の芝生』プランには、田園的で民主的な都市型公園に対するダウニングの理想像からの直接的な影響をみてとることができる。『緑の芝生』プランによって、ヴォーとオウムステッドは、セントラル・パーク設立運動の先駆者であるダウニングに敬意を示した。事実、ヴォーとオウムステッドが「長さ約2.5マイル、幅0.5マイル、770エーカーの土地（そのうち、150エーカーはクロトン貯水池のために確保された）」のデザインを

創案するプロセスで、二人の心には、すでに亡き彼らの後ろ盾であったダウニングが常に意識されていた（Chadwick 1966: 183）。ヴォーとオウムステッドは、人々が集うことのできる静かな場所を理想としたが、このような理想の景観は、以下に示すダウニングが執筆した随筆からの抜粋のなかにも巧みに描写されている。

あの区域には、緑の草原の息づかいや美しさ、自然の芳香や新鮮さを確かに感じることができるような公園と遊び場を配置する広域地帯を確保するのに十分な空間があるだろう。その中心には、クロトン水路につながる大きな貯水池が設計される。この貯水池は、その周辺にある澄んだ美しい湖の源流となり、何エーカーにも渡って公園内に鎮座し、極めて洗練された自然のコントラストをつくり出すことによって、周囲の樹木の魅力を引きだすだろう。そのような公園を馬車や馬で周遊する市民たちは、田舎道と農村風景のもつ本質的な喜びを享受し、がたがたと騒がしい車道とまぶしく光るレンガづくりの壁をしばしの間、忘れることができる。散歩に訪れる場合、一人になりたければ、世間から隔絶されたような静寂な小道を選び、楽しい気分になりたいときには、何千人もの笑顔で満たされた幅広の散歩道を選ぶことができる。思索的な住民は、木の葉のさざめく木々と会話を楽しむために朝方にこの公園を訪れるだろう。仕事を終えた商人は、オープン・スペースのなかで世間の人々とまじわることによって至福の時間を楽しむために夕べに公園におもむくだろう（下線筆者）（Chadwick 1966: 183）。

コンペティションにおいて、ヴォーとオウムステッドは、ダウニングが思い描いた美しい景観を刷新して、ニューヨーク市で初めて建設される公共公園に必要とされるいくつかの規定にのっとったデザインを提出することを要求された。コンペティションに参加するすべてのデザインは、次のような要件を満たさなければならなかった。すなわち、東西をほぼ直交する四つの交差点、20 から 40 エーカーの練兵場一つ、3 から 10 エーカーの運動場三つ、展示会やコンサートのためのホール数ヶ所、装飾的な噴水一つ、展望台一つ、2 から 3 エーカーの花壇とそのデザイン一つ、冬に水を張ってスケート場にするための場所一つを設計図に配置しなければならなかった。公園造成のための経費は 100 から 150 万ドルの範囲内に制限されていた。

ヴォーとオウムステッドのデザインは卓越したものであった。上述の要素はすべて調和すべく設計図におさめられた。公園建設予定地の利用に関する彼らの発想は次のようなものであった。第一に、「植え込みをつくることによって、公園敷地内にいる人たちの視界から可能な限り公園外部にある不調和なものを遮ることで都会の雑踏から隔離された空間を確保」し、第二に、農村コミュニティの生活におけるあらゆる喜びをニューヨーク市民に提供できるような「静寂で開かれた田園風景を創出」し、第三に、「開かれた景観の柔らかさと簡素さによって、ディテールの曖昧さとピクチャレスクな雰囲気とのコントラストを際立たせるような風景のパッセージを演出する」ことである（Fabos 1968: 18）。まさにこのヴォーとオウムステッドのクリエイティビティこそが、ダウニングの構想と美しい英国式風景庭園の伝統を新たなヴィジョンへと昇華させた。彼らのデザインは、ひとつのスタイルとしての一貫性を重視していたのみならず、ニューヨーク市の将来の発展に対する洞察力を示していた。「セントラル・パーク」という名称が示唆するとおり、いずれはこの公園を中心としてニューヨークの人口が増加していくことが期待されていた。

このコンペティションの最優秀デザイナーたちにもたらされた報酬は 2000 ドルの賞金だけではなかった。まさにこのヴォーとオウムステッドは、この計画を遂行するように任命され、1858 年 5 月 17 日、オウムステッドは主任建築士に任命された。彼の責任は都市デザイナーとしての責任にとどまらなかった。労働者の雇用、現場監督、公園の治安維持といったあらゆる義務が彼にのしかかることになった。彼の元上司であったヴィールの役職は廃止され、『緑の芝生』プランに基づいてセントラル・パークを完成させるという案が承認されたときに、この役職は、新たに創設されたオウムステッドの事務所に吸収された。この時点において、セントラル・パーク建設が開始されることになった。

要するに、ジャーナリストのダウニングたちが最初にニューヨークの広大な田園的で民主的な庭園の設立を構想したのだが、そのモチーフを、建築と設計を任うオウムステッドとヴォーという二人のデザイナーが慎重に進化させていったのである。彼らは、ニューヨークのコミュニティ・デザインの意味をヨーロッパやアメリカ南部との関係において考えてきた。言い換えれば、セントラル・パークの必要性は『緑の芝生』プランという枠組みのなかで結晶化された。このようにして、ニューヨークのコミュニティ・デザインは、その第二局面を達成したのである。

▶ 3 公園内の移動とコミュニケーション環境

本節では、コミュニティ・デザインの観点からセントラル・パーク設立運動を評価してみたい。そして、何が創成されたのか、また、セントラル・パークを設立した結果として、どのような価値がもたらされたのかについて、明らかにしてみよう。セントラル・パークに関する当初の理想と現実の比較、つまり、田園的な理想と都市の現実の関係性は、このような都市再開発運動の真の価値を評価するうえで適切な指標になるだろう。

ニューヨークに設立される都市型公園に要請されていたことは、単純ではなかった。すなわち、審美的かつ実用的であることが要求された。景観芸術作品となるべく、魅力的な風景の連続が創出するパッサージュを鮮明に演出することが望まれていた。また、活動的なレクリエーションの要素と荘厳な雰囲気を提供されれば、人々の倫理観を高めることができるだろうとオウムステッドは確信していた。セントラル・パークはまた、実用的であることが要求された。ニューヨークが絶えず発展し続けるという社会的な状況において、都市型公園の役割は都市生活の安全性と利便性を高めることにまで及んだ。

いくつかの事例によって示すことができるように、セントラル・パークは、以上のような審美的かつ実用的な要請に十分に応えた。第一に、セントラル・パーク建設地の地勢に配慮することによって、より低いコストで、多様な景観を提供することができた。セントラル・パークの建設予定地は、貯水池の北と南に二等分された。クロトン貯水池と106番街（後に110番街に拡張される）を範囲とする北部は「豪快かつ雄大」であった（Frederick Law Olmsted and Calvert Vaux, *Description of a Plan for the Improvement of the Central Park: "Greensward"*, 1958 [1868; rpt.], Fein 1968: 64 に引用）。岩石が露出した風景はそのまま残され、都市の景観とのコントラストが鮮明になっていた。86番街よりも下に位置する南部は、北部よりも多様性に富んでいた。最も特徴的なのは、ちょうどクロトン貯水池の南側にある長い丘陵であり、岩石が露出し、樹木が生い茂っていた。

建設予定地の中央部や西部は、起伏のある台地であった。東部は、芝生や庭園風に整えられた優雅でなだらかにうねるような土地となっていた。最南端には、いくつか崖地のある平坦な草原がある。このような地勢に合わせて、ヴォーとオウムステッドは、細心の注意を払いながら、セントラル・パーク設立に取り掛かった。以上のような特徴をそのまま維持することが重要であるという認識を、二人ともしっかりと共有していた。

セントラル・パークに残された数エーカーの土地を例外として、ニューヨークの土地がすべて平坦にされて、多様性に富むマンハッタン島の光景が単調で直線的な道路の連続へと変容していく日がやってくるだろう。建設予定地の美しい輪郭がいかに価値あるものであるかは、より明瞭に認識されるだろう。それゆえ、悠々として起伏のある稜線、ピクチャレスクで岩石が露出した景観に手を加えるといったことを可能な限り避ける一方で、早急にセントラル・パーク設立に取り掛かり、あらゆる正当な手段を用いることによって、以上でみてきたような個性的かつ特徴的な景観効果の源泉を慎重に開発していくことが望ましいと思われる（Commissioners of Central Park, Document No.5 of 1858, in Reys 1965: 336）。

もう一つの特徴的な例として、公園内の交通システムが挙げられる。それぞれの交通循環を段差をつけて分離し、公園横断道路を凹型で造成したのだが、これは便利であったのみならず、田園風景の隔絶された感覚を市民に与えることに成功した。公園内を往来する商業交通の増加につれて、田園風景の景観が損なわれることが懸念されたが、それゆえに、ヴォーとオウムステッドは、馬車、乗馬者、歩行者、通常の路上交通手段を馬車道、乗馬道、歩行者専用通路、公園横断道路といったように、それぞれ完全に分離した交通システムを設計した。すべての交差点では地下道が交通渋滞を緩和するのに役立った。そのような目的をもってつくられたのが凹型の道路であり、その結果、交通の往来が人々の目線よりも下になり、目障りになるのを避けようとした。

オウムステッドとヴォーは「このようにそれぞれの交通手段を立体的に分離することの価値は次の点にある。まず分断からの自由である。そして、喜びを求めてセントラル・パークにやってきた人々に与える居心地の良さである」と述べている (Olmsted and Vaux's Original Report, quoted in *Forty Years of Landscape Architecture*. Vol. II. by Kimball and Olmsted Jr., 1928, Chadwick 1966: 185 に引用)。その理由として、オウムステッドは「野原と野原の間に隘路をとこところはさむことによって、公園を歩く訪問者たちにとって、セントラル・パークはほかの景観が創出するよりもより遥かなる広がりをもって実感される」という信念を抱いていた (Fabos 1968: 24)。

レクリエーションの点からみると、セントラル・パークは、次に挙げる三つの喜びすべてを提供できる場所であった。第一に、さまざまな美しい田園風景が与えてくれる審美的・心理的喜びである。第二に、活動的なレクリエーション施設やスポーツによってもたらされる身体的喜びである。第三に、他者との強力な仲間意識やコミュニティ意識を強化する機会によって得られる社会的喜びである。

以上のような目的のために、セントラル・パークは娯楽に満たされていた。さまざまな地勢から楽しめる開かれたり閉じられたりする眺望の連続や凹型道路は、訪問者の目を癒し、新鮮な気分をもたらししてくれた。特別に造成された専用池ではボート漕ぎや遊泳ができるようになっていた。運動場は、スポーツ好きな子どもたちに開かれていた。公園を横切る曲がりくねった小道の動線をたどって、サイクリングや散歩などの運動を楽しむこともできた。また、セントラル・パークには、社会的コミュニケーションの中心地として、モールや噴水が造成された。そこで市民は出会い、会話をし、コンサートを聴くことができた。オウムステッドが望んだのは、「コミュニティが市民のために整備すべきすべての種類のレクリエーションを提供すること」であった (Fabos 1968: 25)。それゆえ、彼は、こうしたエリアそれぞれを機能ごとに分離し、おのおの開発を進めたのである (Fabos 1968: 25)。

セントラル・パークの多くの精緻なディテールのなかでも、全体として田園環境をおもわせる雰囲気創出は公園設立のプロセスにおいて最も特筆すべきである。たとえば、オウムステッドとヴォーは、田園風景を演出するために、両脇にずっと並木を配したモールからできる限り人工的建造物がみえないように努めた。この配慮は次のような考え方に基づいている。

公園訪問者の利益を考えると……、……人工的な美よりも自然の美を引き出すことに尽力すべきである。公共公園における望ましい目的のために、たくさんの優美な建造物が適切なかたちで建てられる場合もありうるかもしれない。しかし、我々は次のように考える。そのような建築構造物は明らかに主要な概念に従うべきであり、いかなる人工的なものも根本理念として視界に入るべきではない。公園という概念そのものが常に見物者の心のなかで最重要でなければならない。(Fein 1968: 49)。

オウムステッドの理解において、このような地勢がはっきりと田園的な傾向を示すことは、「反都市」を意味するものではなかった。1870年に発表した論攷で、オウムステッドは都市化の進展に対する支持を表明している。なぜなら、都市化は、自由、文化、社会の成員全員の繁栄といった概念の前進と密接に関連しているからである。彼にとって、都市化は不可避的な現象であるのみならず、基本的には望ましい現象であった。とりわけ、「都会への人口流入の限りなき増大」(Glaab 1971: 355)に備えることによって、人々は、よりよい都市をつくることができるからである。公園は、まさに都市の中心においてコミュニティ意識を強化する手段となる。なぜなら、公園は市民の身体的および社会的な健康状態を維持し、平等なレクリエーションの機会を提供することによって、市民の連帯を促進することが期待できるからである。こうして、田園的なアメリカ合衆国において生まれた理想的な民主主義は、アメリカ文明の典型的な舞台となった現実の都市生活に適応しなければならないのである。オウムステッドは、『セントラル・パークのはじまり』と題された論攷のなかで次のように記している。

我々の国は、進歩のある局面に突入した。そこでは、わが国の福祉は、大都市における生命の利便性、安全性、秩序、経済機構に依存すべきものである。これらを欠いては、わが国が繁栄することはできない。これらが進展することなしには、わが国の徳、知恵、安寧が増加することはできない (Frederick Law Olmsted Jr., "The Beginning of Central Park: A Fragment of Autobiography", [ca. 1877], Fein 1968: 52 に引用)。

それゆえ、自然を崇高な経験としてとらえる作家のH・D・ソローやR・W・エマソンのような超絶主義者とは異なり、オウムステッドの主な関心は、自然を媒介とした具体的な都市再開発にあった。すなわち、ニューヨークの都会人のための田園的かつ民主的な公園を建設することである。セントラル・パークにあるとき5万人の人々が一堂に会したのをみたとき、オウムステッドは自分の考えに対する確信を強めた。「みんなが集まるといふ期待を胸に抱きながらそこにはあらゆる階級が集まってくる……。それぞれの個人は、ただそこにいるだけで、他の人たちの喜びを高めることができる……」ようなこれほど多くの人々が居場所を共有することができる場所は他にあるだろうかと彼は記している (Glaab 1971: 355)。要するに、セントラル・パークの設計において、オウムステッドが田園的な環境に力点を置いた理由は、田園風景がもつ都市の有用性にあった。ルイス・マンフォードによれば、「オウムステッドは自然を都市化することで、都市を自然化した」のである (Glaab 1971: 355)。

工学技術面での問題や政治的介入にもかかわらず、セントラル・パークが成功したことは明らかであった。初めて開園した1862年、1日に2万5000人が入場した。記録によれば、1863年には40万人を超え、1865年には750万人、1971年にはほぼ1100万人の入場者があった。富裕層、貧困層を問わず、すべての人が「この国で最初の本物の公園」がもつ優雅な魅力を楽しむようになった。このことは「極めて意義のある民主的な進展」であった (Roper 1973: 141)。セントラル・パークの成功は、間もなく、レクリエーションの機会を得ることができなかった大半のニューヨーク市民に影響をもたらした。また、アメリカの百科事典に「公園」(park)という語が初めて掲載された。アップルトン1861年版の『新アメリカ百科事典』(*New American Cyclopedia*)に、オウムステッドが「公園」の項目を執筆したのである。セントラル・パークから恩恵を受けたのはニューヨーク市だけではなく、セントラル・パークは審美的かつ機能的に優れたものであったので、その後、アメリカ国内の多くの都市型公園は、セントラル・パークをモデルとしたのである。

重要なのは、セントラル・パークを設立することで、都市再開発の理想が実現したということである。セントラル・パークの成功は予想を超えるものであった。審美的価値と実

用的機能をそなえたセントラル・パークは、それゆえに、最初の都市型公園としてコミュニティ・デザインの歴史にその名が刻まれたのである。

▶ 4 結論：民主的な、しかしコモンズではない未来のヴィジョン

セントラル・パークの設立は、コミュニティ・デザインという形でアメリカ的なナショナリズムが発現した最も初期のモデルとして評価することができる。アメリカでは都市化が広まり、国境を越えた移民の増大に伴って、国民（nation）の内実に変容していったのだが、セントラル・パークは、こうした現象に対して、アメリカが示した最初の反応であった。それゆえ、このコミュニティ・デザインは、たんなる歴史的な出来事にとどまらない重要な意味があったといえる。とりわけ、人口構成やコミュニケーションがグローバル化の傾向を強めていく時代において、都市に関する考察を行なっている私たちにとっては、大きな価値を創出している。

セントラル・パーク設立運動の展開は、慎重であると同時に大胆なものであった。このコミュニティ・デザインの目的は、広大な緑あふれる公園をニューヨークの中心に建設することによって、都市という集合的生命の質を高めると同時に、国家の象徴ともいべきヴィジョンをつくりだすことであった。産業化が進むニューヨークにおいて、都市化が進展するという現実直面したニューヨーク市民は、都市型公園の未来のヴィジョン——ヨーロッパ貴族制とは区別されるアメリカ民主主義における田園的理想と誇りを反映した理想的な公共公園——を実現しようと努めた。その過程において、第一に、まず都市型公園が必要であることが認識された。ダウニング、プライアント、その他のオピニオン・リーダーたちは、メディア・キャンペーンにおいて民衆の関心を喚起し、都市再開発を進めるうえでの合意形成に貢献した。第二に、都市型の公園が必要であるという考えは、農業ジャーナリストから都市デザイナーに転じたオウムステッドと英国出身のヴォーによって『緑の芝生』プランへと具体化された。この二人の都市設計家は、ヨーロッパやアメリカ南部地域でみられるような格差社会の矛盾と都市生活の質を向上させることの重要性を認識しながら、「アメリカ的」な都市型公園を設立した。最後に、セントラル・パークは一般市民にむけて開放されていたがゆえに、大都市を擁するアメリカの真の象徴となった。セントラル・パークは、機会平等、さらには、都市と田園的コミュニティがもっている価値の統合を象徴している。

セントラル・パークは、重要な成果をもたらした。アメリカで初めてのこの公園は、審美的かつ実用的なものであった。セントラル・パークは、ニューヨーク市民に精神的・身体的・社会的レクリエーションとコミュニケーションの機会を提供した。セントラル・パークはその人気や知名度だけではなく、アメリカのその他の都市型公園にも影響を及ぼしたという点は特筆すべきだろう。

しかしながら、メディア・キャンペーンによって設立されたセントラル・パークの成功を過去のものとして捉えるのは妥当ではない。あらゆるコミュニティ・デザインを評価する際、「デザイン実践の完了後」も重要な要素となってくるからである。セントラル・パークも例外ではない。先駆的な公園として、都市型公園に内在するさまざまな問題にまっさきに直面するというのは、セントラル・パークの宿命であり続けた。たとえば、公園の運営、環境保全、管理、警備といった問題については、今日も激論が交わされている。セントラル・パークが創設されてから長い年月が経過し、社会的環境や人々の考え方は変化していった。レクリエーション施設の増設を望む声が強まっているが、これは、自然の地勢を保全するというセントラル・パーク創設当初の関心と相反することになる。セントラル・パーク内で頻発している犯罪も問題となっている。それゆえ、今日の都市社会が抱える上

記の諸問題に取り組むことが将来のコミュニティ・デザインにおける課題となるのである。

最後に、これらの事象が示すように、セントラル・パーク創設にみられるコミュニティ・デザインとメディア・キャンペーンはアメリカの都市史とメディア・コミュニケーションの相互作用をみるうえで、なおも参照されるべき存在である。このようなセントラル・パークにみられる崇高な理想と慎重な実践はこれからも高く評価されるべきであると考えられる。

●付記

本稿は Ogawa (Nishiaki) 1992 を大幅に加筆、翻訳したものである。原文のより詳細な表記については参照されたい。また、論文執筆の史料収集を可能にしてくれた東京工業大学図書館に記して感謝したい。

●参考文献

- Baydo, G. R. (1974) *A Topical History of the United States*. Arlington Heights, IL: Forum Press.
- Beveridge, C. E. and D. Shuyler, eds. (1983) *The Papers of Frederic Law Olmsted*. Vol.III. Baltimore, MD: The Johns Hopkins Univ. Press.
- Blake, P. (1964) *God's Own Junkyard: The Planned Deterioration of America's Landscape*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Chadwick, G. F. (1966) *The Park and Town: Public Landscape in the 19th and 20th Centuries*. New York: F.A. Praeger.
- Cooper Hewitt Museum, The Smithsonian Institution's National Museum of Design (1982) *Cities: The Forces That Shape Them*. New York: Rizzoli.
- The Editors of *Fortune* (1958) *The Exploding Metropolis*. Garden City, NY: Doubleday.
- Fabos, J. Gy., T. Mild and U. M. Weinmayr (1968) *Frederick Law Olmsted, Jr.: Founder of Landscape Architecture in America*. Amherst, MA: Univ. of Massachusetts Press.
- Fein, A. ed. (1968) *Landscape into Cityscape: Frederick Law Olmsted's Plans for a Greater New York City*. Ithaca, NY: Cornell Univ. Press.
- . (1972) *Frederick Law Olmsted and the American Environmental Tradition*. New York: George Braziller.
- Glaab, C. N. and A. T. Brown (1971) *A History of Urban America*. New York: Macmillan.
- Goldstone, H. H. and M. Dalymple (1974) *History Preserved: A Guide to New York City, Landscape and Historic Districts*. New York: Simon and Schuster.
- Goodman, P. (1960) *Communitas: Means of Livelihood and Ways of Life*. New York: Random House.
- Gottman, J. (1966) *Megalopolis: The Urbanized North-Eastern Seaboard of the United States*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Heckscher, A. (1977) *Open Spaces: The Life of American Cities*. New York: Harper and Row.
- 本間長世 (1984) 『文明としてのアメリカ：大いなる荒野、大いなる都市』東京：日本経済新聞社。
- Hofstadter, R. (1955) *The Age of Reform: From Bryan to F.D.R.*. New York: Random Houses.
- Hohenberg, P. and L. Lees (1985) *The Making of Urban Europe, 1000-1850*. Cambridge, MA: Harvard Univ. Press.
- 伊藤陽一他編 (2013) 『グローバル・コミュニケーション：キーワードで読み解く生命・文化・社会』京都：ミネルヴァ書房。
- Jackson, J. B. (1984) "The American Public Space," *The Public Interest*, 74 (Winter): 52-65.
- Jacobs, J. (1961) *The Death and Life of Great American Cities*. New York: Random House.
- Mckelvey, B. (1968) *The Emergence of Metropolitan America, 1915-1966*. New Brunswick, NJ: Rutgers Univ. Press
- マンフォード, L. (1974) 『都市の文化』(生田勉 訳) 東京：鹿島出版局
- Mumford, L. (1955) *Sticks & Stones: A Study of American Architecture and Civilization*. New York: Dover.
- 正井泰夫他編 (1976) 『総合研究アメリカ』東京：研究社。
- 小川 (西秋) 葉子他編 (2010) 『〈グローバル化〉の社会学：循環するメディアと生命』東京：恒星社厚生閣。
- Ogawa (Nishiaki), Y. (1992) "Landscape of American Nationalism: The Making of Central Park, New York in Euro-American Relations," *Ikkyo Kenkyu*, 17 (3): 111-139
- Rolph, E. (1987) *The Modern Urban Landscape*. Baltimore, MD: The Johns Hopkins Univ. Press.
- Reps, J. W. (1965) *The Making of Urban America; History of City Planning in the United States*. Princeton, NJ: Princeton Univ. Press.
- Roper, L. W. (1973) *F.L.O.: A Biography of Frederick Law Olmsted*. Baltimore, MD: The Johns Hopkins Univ. Press.
- Short, J. F. ed. (1971) *The Social Fabric of the Metropolis: Contributions of the Chicago School of Urban Sociology*. Chicago, IL: The Univ. of Chicago Press.

- Simon, K. (1962) *New York Places and Pleasures: An Uncommon Guidebook*, Rev. ed. Cleveland, OH: World.
- Star, R. (1984) "The Motive behind Olmsted's Park," *The Public Interest*, 74 (Winter): 66-76.
- Strauss, A. L. ed. (1968) *The American City: A Sourcebook of Urban Imagery*. Chicago, IL: Aldine.
- Tilly, C. (1986) "Cities and States in Europe, 1000-1800," *Theory and Society*, 15:563-584
- Warner, S. B. (1972). *The Urban Wilderness: A History of the American City*. New York: Harper and Row.
- Warner, W. L. ed. (1963) *Yankee City*. New Haven, CT: Yale Univ. Press.
- Weimer, D. R. ed. (1962) *City and Country in America*. New York: Meredith.
- Weinberg, N. (1979) *Preservation in American Towns and Cities*. Boulder, CO: Westview.
- White, E. (1949) *Here is New York*. New York: Harper and Brothers.
- White, M. and L. White (1962) *The Intellectual Versus the City*. Cambridge, MA: Harvard Univ. Press and MIT Press.
- Wilson, J. Q. ed. (1968) *The Metropolitan Enigma: Inquiries into the Nature and Dimensions of America's "Urban Crisis"*. Cambridge, MA: Harvard Univ. Press.

小川（西秋）葉子（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所専任講師）